

## 女紅場における勸業・裁縫教育 —仙台女紅場を中心に—

知野 愛(郡山女大)

(目的) 裁縫教育史の源流の一つに、女紅場の存在がある。明治初年、女紅場は各地に設立されたが、本発表では勸業的要素の強い仙台女紅場を取り上げ、その成立背景、教師・生徒数、年齢、学科内容、製作品などを資料から解明し、他地域の勸業女紅場と比較する。

(方法) 資料として「宮城縣國史」、「宮城県庁文書」、「明治年間府県統計書集成」、奥羽日日新聞(以上宮城県立図書館蔵)、『文部省年報』等をあわせて用いた。

(結果) 仙台女紅場は、明治12年1月梅津教知の私邸に設置されたことに始まる。梅津教知の妻照子は、女紅場設立以前から女教院という名の神道系女子教育機関の教導職を務めていたが、女紅場設立後は裁縫教師を兼務した。明治時代の裁縫教育の二大先覚者の一人朴沢三代治の教え子達が裁縫教師を務めているため、仙台女紅場の裁縫科は朴沢の教授法の影響を受けたと考えられる。『文部省年報』に仙台女紅場が登場する明治16年当時、仙台の女子教育機関としては女紅場の他に、朴沢の松操私塾、彤管私塾があった。同女紅場では、機織科と裁縫科の二科が置かれた。運営費には、学費の他、機業場の収益金を充てた。製作品は、装飾品ではなく生活に密着した実用的な物を作り、実生活に即役立つ教育であった。生徒は、約140人のうち13～16歳が90%以上を占め、全員が仙台区内の出身者であった。その他、生徒・教員数の推移や卒業生の数、裁縫製品の料金、併設する梅津機業場の運営状況との関連を資料から解明した。同じく勸業女紅場である新潟女紅場と比較すると、教師に対する評価、製作品等に相違点が見い出された。